「悲とアニマ」展　**公開シンポジウム①　「モノ学・感覚価値研究とアート」　2015年3月7日　鎌田東二**

日時：2015年3月7日（土）16：00～18：00

場所：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

　基調講演①：「モノ学・感覚価値研究とは何か」鎌田東二

　基調講演②：「モノ学・感覚価値研究会アート分科会の歩み」大西宏志（京都造形芸術大学教授）

　基調講演③：「『悲とアニマ』展について」秋丸知貴（インディペンデントキュレーター・美術史家）

　総合討論：岡田修二（画家・成安造形大学教授）/近藤髙弘（陶芸・美術作家）/大舩真言（画家・現代美術家）

１、「モノ学・感覚価値研究」とは何か？

　「モノ学・感覚価値研究会」は、2006年4月21日付けで、日本学術振興会科学研究費補助金交付に採択された「モノ学の構築―もののあはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」を研究し、「モノ」と「感覚価値」をあらゆる角度と発想から考察し、表現してゆく“アヴァンギャルドな研究会”です。  
　この研究会では、

①日本人が「モノ」をどのように捉え、「モノ」と心と体と命及び自然との関係をどう見てきたかを検証すると同時に、「カワイイ・カッコイイ・ワクワク・ドキドキ・こわい・すてき・おもしろい・たのしい」などの快美を表わす感覚価値形成のメカニズムを分析します。

②「モノ」が単なる「物」ではなく、ある霊性を帯びた「いのち」を持った存在であるという「モノ」の見方の中に、「モノ」と人間、自然と人間、道具や文明と人間との新しい関係の構築可能性があると考えます。

③21世紀文明の創造には新しい人間認識と身体論と感覚論が必要であり、感覚基盤の深化と再編集なしに創造力の賦活と拡充はないでしょう。それゆえ、「モノ」の再布置化と人間の感覚能力の可能性と再編成を探ることは極めて重要な21世紀的課題となるはずです。

④人間の幸福と平和と結びつく「モノ」認識と「感覚価値」のありようを探りながら、認識における「世直し」と「心直し」をしていくのが本研究の大きな目的となります。

⑤また、「モノ」と「感覚価値」を新しい表現に結びつけ、大胆な表現に取り組んでいきます。

２、研究・表現成果（研究会活動については、「モノ学・感覚価値研究会」HP参照：<http://mono-gaku.la.coocan.jp/>）

A：展覧会活動

① 第1回展「物からモノへ――科学・宗教・芸術が切り結ぶモノの気配の生態学」（京都大学総合博物2010年）

② 第2回展「物気色（モノケイロ）――物からモノヘ」（虚白院・2010年）

③ 第3回展「モノケイロケモノ」（東京画廊・2011年）

④ 第4回展「物気色11・11」（遊孤草舎・2011年）

⑤ 第5回展「続・物からモノへ――うつしとうつわ」（遊孤草舎・2014年）

⑥ 第6回展「悲とアニマ――モノ学・感覚価値研究会展」（北野天満宮・2015年）

B：出版活動

①鎌田東二編『モノ学の冒険』（創元社・2009年）

②鎌田東二編『モノ学・感覚価値論』（晃洋書房・2010年）

③鎌田東二・近藤髙弘『火・水（KAMI）――新しい死生学への挑戦』（晃洋書房・2010年）

④モノ学・感覚価値研究会編『物気色』（美学出版・2011年）

⑤『モノ学・感覚価値研究（年報）』（第1号・2007年～第9号・2015年）

京都大学博物館2010年1月能舞「ランビルの森」、虚白院展覧会能舞「虹鬼伝説」2010年

C：研究テーマ

1）「モノ」認識の原理的研究―「もののあはれ」「もののけ」から「ものづくり」まで

2）モノと心の統合点としての身体性の研究→科研「身心変容技法の比較宗教学－心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」（2011年度～2014年度）

3）「感覚価値」形成の研究

4）モノ認識の比較文化史的・比較文明史研究

5）感覚拡張の研究→渡邊淳司『情報を生み出す触覚の知性:情報社会をいきるための感覚のリテラシー』 (DOJIN選書、2014年)

6）「気配」の研究

３、「悲とアニマ」展開催概要

　なぜわたしたちは北野天満宮で「悲とアニマ」展を行おうと企画したか？

　いうまでもなく、北野天満宮は御祭神として菅原道真公をお祀りする神社である。だが、歴史学者の上田正昭氏によれば、人神として菅原道真公をお祀りする以前から、北野の地には雷神信仰や天神信仰があった。その自然神信仰の上に、人神としての菅原道真公への鎮魂と顕彰と讃仰（信仰）が加わったのである。

　つまり、菅原道真という「人」が「怨霊」になり、その後「神」になったのは、北野という場所に秘密があった。それはもともとあった天神信仰、つまり、雷と稲作豊穣（自然の驚異と恵みの表裏一体）の基盤の上に、菅原道真公への思慕と讃嘆と鎮魂が接木され、定着し、強力な北野天神信仰を生み出していったのである。

　わたしたちの「悲とアニマ」展は、直接的には東日本大震災を機に、その「悲」を、生死を越えた永遠のいのちに昇華していく「アニマ（霊魂・霊性）」に接続したいという非願を持ってこの展覧会を企画した。

　その「悲」を生きる力や霊性に転換する信仰こそが北野天満宮の信仰の本質だと思うがゆえに、わたしたちはこの展覧会を何が何でも北野天満宮で開催したいと考えたのである。

科研「モノ学の構築―“もののあはれ” および “もののけ” から “ものづくり” までを貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」の概念見取り図

1. モノの古代的展開～霊性としてのモノが中心～例えば、三輪の「大物主神（おおものぬしのかみ）」、「物実（ものざね）」、「物部（もののべ）」「物怪（もののけ）」など。
2. モノの中世的展開～霊性としてのモノに者性としてのモノが加わる～例えば、世阿弥が『風姿花伝』で主張した「能＝申楽」は「物学（ものまね）」であるという主張など。
3. モノの近世的展開～者性としてのモノが中心～例えば、本居宣長が王朝文学論や「源氏物語」論で展開した「もののあはれを知る」など。日本的感受性（Japanese sensitivity）の探究。
4. モノの近代的展開～物性としてのモノが中心（物質主義的なモノ観に頽落）。
5. モノの現代的展開～霊性・者性・物性としてのモノの再発見・再興～例えば、もの派とモノ学。

宇宙・霊性

│

自然

│

火・水・土

│

伝統文化

∵

モノ派

│

モノ学